

## ヨブ記8-10章 「正しい神への訴え」

### 1A 義なる神 8

1B 杓子定規な神学 1-7

2B 机上の理論 8-22

### 2A 訴えられない潔白 9

1B 知恵のある方 1-13

2B 正しい方 14-24

3B 仲裁者 25-35

### 3A ぶちまける不平 10

1B 人間の罪定め 1-7

2B 滅ぼすための人造り 8-17

3B 死ぬ前の休み 18-22

## 本文

ヨブ記8章を開いてください。私たちは今、ヨブ記を通して「命」についての、根本的意味について見ることができています。ヨブが財産も、子供たちも、そして健康までも失って、ただそこに存在している身となってしまいました。その時にはもはや、「教会が終わったら、今日は残りの時間、何をしようかな?」とか、そのような質問はしなくなります。むしろ、「私はなぜ生きているのか。」「なぜ生まれてきたのだろうか。」「死後はどうなるのか?」など、命についての根本を探られるのです。私たちは、いつかの時点でこれらのことを考えなければならないのですが、表面的なこと、周辺的なことを気にするので精一杯です。しかし今、たとえヨブのような苦しみに遭っていなくても、この苦しみを通して、命に関わる真剣な問いをしてみたいと思います。

今、ヨブと三人の友人の議論を呼んでいます。ヨブが生まれた日を呪った、その後から友人が一人一人ヨブに問いかけます。そしてヨブが答えます。今回は、エリファズが語ったこととヨブがそれに受け答えしたところを読みました。今回は、ビルダデが問いかけて、ヨブが答えるところです。

### 1A 義なる神 8

1B 杓子定規な神学 1-7

8:1 シュアハ人ビルダデが答えて言った。8:2 いつまであなたはこのようなことを語るのか。あなたが口にすることは激しい風のような。

ビルダデが、エリファズに答えるヨブの言葉に対して、「激しい風のような」と言っています。あなたの言葉は激しいが、まるで中身がないという意味です。最年長者エリファズの語り始めと比べてみましょう。「もし、だれかがあなたにあえて語りかけたら、あなたはそれに耐えられようか。しかし、

だれが黙っておられよう。(4:2) エリファズには、ためらいがありました。これから言うことはあなたには耐え難いことかもしれないが、黙ってられない、ということです。そしてエリファズは、ヨブはこんな人ではなかった、という落胆の思いを語りました。「あなたは、これだけ潔白に生きてきたのに、そして苦しんでいる者たちを助けていたのに、一度、自分が苦しむとこうなってしまうのか。」という、詰りのような、叱咤激励のような言葉をかけました。

しかしビルダデには、そのような慎みがありません。「物事は正しいことをしっかりと言うべき。」という信条です。おそらく、エリファズよりもビルダデは年が若いでしょう。そして次回学ぶ、ツォファルはもっと年が若いと思います。そこにある違いは、「信仰における人生経験をして、どこまで自分が砕かれているか。」ということです。しばしば言われるのは、「結婚するまでは、神の願われる結婚像についてたくさん語ることができる。」あるいは「神の願われる子育てについて、子供が生まれるまでたくさん語ることができる。」というものです。教会についても、奉仕についても、何についても、自分自身が失敗をして、主に拠り頼むことを覚えていくことによって、初めて、口ではなく行動によって神の命令に従うことができるのです。

8:3 神は公義を曲げるだろうか。全能者は義を曲げるだろうか。8:4 もし、あなたの子らが神に罪を犯し、神が彼らをそのそむきの罪の手中に送り込まれたのなら、

新改訳だけが、4 節の前に「もし」を付けていますが、新共同訳も口語訳も事実として訳しています。新共同訳はこうなっています。「あなたの子らが／神に対して過ちを犯したからこそ／彼らをその罪の手にゆだねられたのだ。」十人の息子と娘が一日のうちに死んだのは、彼らが罪を犯していたからなのは当たり前だろう、ということです。神は正義の方であるから、悪を行なった者を苦しめるのだ。苦しんでいるのだから、息子、娘が罪を犯したのは当たり前ではないか、ということです。私たちは、これは事実を反することを知っています。ヨブは、彼らが心で神を呪ったかもしれないと思って、日の終わりに全焼のいけにえを捧げたのです。ですから事実を反するのですが、ビルダデの頭の中では全く正しいのです。これが、今朝もお話しました「正しいことを言っていて、正しく無くなっていく」ことです。

コリント第一 8 章 1 節に、「知識は人を高ぶらせ、愛は人の徳を高めます。」とあります。知識には、必ず憐れみが伴っていなければそれは真の知識ではありません。例えばしばしば言われることですが、説教者は地獄について説教するなら、地獄のことについて涙を流さなかったら語ることはできない、という言葉です。エレミヤ書では、彼がどれだけ泣いたか分かりませんが、神の裁きを告げる厳しい言葉の背後には、彼の目が腫れに腫れて、前が見えなくなる程泣いた、エレミヤの涙に裏打ちされた裁きでありました。もう一つは、知識には「へりくだり」が伴っていなければいけません。つまり、その知識はまず主が自分を教えるために与えられたのです。自分自身が、主からの語りかけで悔い改め、行ないを変えて、へりくだって歩むために与えられたのです。つまり、今持っている知識が、自分をどれだけキリストに似た者に近づけたのかどうか、であります。もし、

この原則を持っていないと、見えるものが見えなくなります。正しいことを語っているのですが、正しく無くなっていくのです。

8:5 もし、あなたが、熱心に神に求め、全能者にあわれみを請うなら、8:6 もし、あなたが純粋で正しいなら、まことに神は今すぐあなたのために起き上がり、あなたの義の住まいを回復される。

8:7 あなたの始めは小さくても、その終わりは、はなはだ大きくなる。

ビルダデのヨブに対する叱責は、単純明快です。「熱心に神を求めよ。全能者に憐れみを請え。」これを行なうならば、主があなたを速やかに回復してくださり、始めよりも栄えさせてくださるということです。これは、実際にヨブの家に起こりました。終わりは、ヨブの財産も息子と娘の数も二倍になりました。けれどもヨブに、「あなたが純粋で正しいなら」と言っています。つまり今、ヨブの動機は不純であり正しくないということです。これを清めならそうなる、と言っているところに間違いがあります。

## 2B 机上の理論 8-22

8:8 さあ、先代の人に尋ねよ。その先祖たちの探求したことを確かめよ。8:9 私たちは、きのう生まれた者で、何も知らず、私たちの地上にある日は影だからである。8:10 彼らはあなたに教え、あなたに語りかけ、その心からことばを出さないだろうか。

彼はこれから神についての持論を展開しますが、それは「先代の人に尋ねよ」つまり、昔からの言い伝えによって確かめよ、と言っています。自分たちの時代といっても、それは移り変わるものであるから、昔からの知恵に頼るのは一番確かなものだから、ということです。この点においても、エリファズと比較してみましょう。彼は、一つの神秘体験を語りました。夜の幻の中で一つの囁きが耳を捕えて、一つの霊が彼の顔の上を通りすぎ、彼は非常に恐れましたが、「人は神の前に正しくありえようか」という声を聞いた、ということです。つまり、自分自身が体験したことに基づいて、語りました。私たちは、けれどもエリファズが経験によって語っても、必ずしもそれが他の人に当てはまる訳ではない、そして、これまでの経験よりもっと大きな、理解を超えた出来事も起こることを学びました。

けれども、エリファズには「自分で神の真理を消化している」というところで、ビルダデより勝っていました。ビルダデは云わば、「私は聖書を学びました。だから、こんなことはおかしいのです。」と学んだ聖書知識だけに拠り頼んで、自分の内で消化していないのに、その知識を振りかざしているのです。ヤコブ書 1 章 22 節に、「みことばを執行する人になりなさい。」とあります。聞いた御言葉を自分のものとして応答して、初めて知識は生きるのです。

8:11 パピルスは沼地でなくても育つだろうか。葦は水がなくても伸びるだろうか。8:12 これは、まだ若芽のときには刈られないのに、ほかの草に先立って枯れる。8:13 すべて神を忘れる者の道

はこのようだ。神を敬わない者の望みは消えうせる。8:14 その確信は、くもの糸、その信頼は、くもの巣だ。8:15 彼が自分の家に寄りかかると、家はそれに耐えきれない。これにすがりつくと、それはもちこたえない。

神を忘れている者、敬わない者を、その望みがいかに脆いものであるかを、頼りにならないかを、沼地のないパピルス、水のない葦、クモの糸に喩えています。

8:16 彼が日に当たって青々と茂り、その若枝は庭に生えいで、8:17 その根は石くれの山にからまり、それが岩間に生えても、8:18 神がもし、その場所からそれを取り除くと、その場所は「私はあなたを見たことがない。」と否む。8:19 見よ。これが彼の道の喜びである。ほかのものがその地から芽を出そう。

たとえ栄えようとしても、神は完全に無にされるということです。

8:20 見よ。神は潔白な人を退けない。悪を行なう者の手を取らない。8:21 ついには、神は笑いをあなたの口に満たし、喜びの叫びをあなたのくちびるに満たす。8:22 あなたを憎む者は恥を見、悪者どもの天幕は、なくなってしまう。

ビルダデは、エリファズのような控えめさはありませんでしたが、内容としては同じものでした。あなたは神から背いているから、悔い改めて立ち上がりなさい。そして、神は必ず憐れみ、あなたを回復してくださるというものです。これ自体は実に正しいのです。神を敬わない者は滅びるが、悔い改めれば神は憐れんで立ち直らせてくださるというのは、真実な言葉です。しかし、ヨブにはそれが当てはまらないというのが問題でした。

## **2A 訴えられない潔白 9**

次にヨブの言葉になります。正しいけれども、当てはまらない言葉ほど、私たちの心を弱めるものはありません。誤用された御言葉ほど、信仰者にとって痛めつけられるものはありません。確かに真理の一部なのですが、歪められた適用は私たちの魂を傷つけます。9 章そして 10 章のヨブの言葉は、その傷ついた心をよく表しています。

### **1B 知恵のある方 1-13**

9:1 ヨブは答えて言った。9:2 まことに、そのとおりであることを私は知っている。しかし、どうして人は自分の正しさを神に訴えることができようか。9:3 たとい神と言い争おうと思っても、千に一つも答えられまい。9:4 神は心に知恵のある方、力の強い方。神に身をこわくして、だれがそのままて済むだろうか。

ヨブは、正しい神は悪者を滅ぼすことは重々知っていました。けれども、問題は、自分は悪者ではない、ということです。神の前に正しく、潔癖に生きてきたのです。だから、そのことを訴える、自分が悪いことを行なったのではないことを訴えたいのです。エリファズとその他、二人の友人に対する言葉で、彼は、「私がどんなあやまちを犯したか、私に悟らせよ。(6:24)」と訴えていました。けれども、友人たちは全く信じてくれません。ですから、残りは神ご自身に対して訴えるのみです。

しかし、大きな問題があります。自分が正しく、潔癖に生きていたと言っても、それは神の正義とは全く次元の違う話です。神は完全な義を持っており、人はただ、その神に拠り頼むことによってのみ自分の義を証明できます。自分の義とは、神の恵みと憐れみによって生きることによって成り立っているものだからです。ですから、神から切り離して、自分の義について証明することなど不可能です。

それでヨブは、徒労に終わるであろうことを、「神と言い争うとしても、千に一つも答えられまい。」と言っています。神がなされていることに対して、自分が知り得ていることはあまりにも限られています。神は神で何かを行われ、自分のできることは、神の示されることのみ忠実であることです。ですから、もし「なぜ、私がこんな理不尽な目に遭わなければいけないのですか。あなたのしていることを知らせてください。」と訴えるものなら、「お前に何が分かるのか。このことについて、お前は知識を持っているのか？」と立て続けに問いかけられることでしょう。ちょうど、パソコンの初心者が、コンピューターのプログラムを製作している人に、「なぜ、このプログラムはこのように動くのですか！」と挑みかかって問い質すのと似ています。そのあまりにも知識の開きによって、初心者は圧倒されてしまうのが落ちです。

9:5 神が山々を移されるが、だれもこれに気づかない。神は怒ってこれをくつがえされる。9:6 神が地をその基から震わすと、その柱は揺れ動く。9:7 神が太陽に命じると、それは上らない。星もまた封じ込められる。9:8 神はただひとりて天を張り延ばし、海の大波を踏まれる。9:9 神は牡牛座、オリオン座、すばる座、それに、南の天の室を造られた。9:10 神は大いなることを行なって測り知れず、その奇しいみわざは数えきれない。

5-6 節は、地震についてのことで、そして7 節はずっと太陽を見ることのできない雨季のことを言っているのでしょう。8 節は天と、海の高波のことで、そして9 節はもちろん星座のことで、これらを創造された神は、測り知れない知恵に富んでおられる方です。これらの神の創造を見る時、普通ならば心は賛美に満たされるのですが、苦しみの中にあるヨブにとってはそうではありません。

9:11 たとい神が私のそばを通り過ぎても、私には見えない。神が進んで行っても、私は認めることができない。9:12 ああ、神が奪い取ろうとすると、だれがそれを引き止めることができようか。だれが神に向かって、「何をされるのか。」と言えよう。9:13 神は怒りを翻さない。ラハブを助ける者たちは、みもとに身をかがめる。



天地を創造した、力と知恵に満ちた神が今や、暴君のようにヨブに迫っています。自分の目で見えないところで通り過ぎて、進んでいき、自分のものを奪い取っていきました。それに抵抗することはもちろんできません。「どうして、そんなことをするのか。」と言い返すこともできません。ラハブというのは、非常に大きな獣であると言われます。制御の利かない獰猛な生き物です。後にエジプトの別称となります。そのような生き物を調教できるような強い者であっても、神の怒りの前ではただ怯えるばかりだ、ということでもあります。

今、ヨブは神の創造とその力、また神の無尽蔵の知恵に対する信仰はありますが、その神の主権の動機となっている神の慈しみに対する信仰は失われてしまっています。慈しみへの信仰を失った神の主権は、それは、それは恐ろしいです。しかし、神の主権を考える時は、その主権者はいつも慈しみを持っている、その良い意図をもってすべてをご自分の望まれるままに動かしておられることを知る必要があります。(参照:ローマ 11:33-36)

## 2B 正しい方 14-24

9:14 いったい、この私が神に答えられようか。私が神とことばを交せようか。9:15 たとい、私が正しくても、神に答えることはできない。私をさばく方にあわれみを請うだけだ。

自分がいくら誤ったことをしていない、と言ったところで、圧倒的な神の正しさと裁きの前では自分はたちまち罪に定められてしまいます。ですから、もっぱら神の憐れみにすがることによってのみ、自分が自分として存在できます。

9:16 たとい、私が呼び、私に答えてくださったとしても、神が私の声に耳を傾けられたとは、信じられない。9:17 神はあらしをもって私を打ち砕き、理由もないのに、私の傷を増し加え、9:18 私に息もつかせず、私を苦しみで満たしておられる。

つまり、ヨブの祈り、主への呼びかけの答えとして、嵐による打ち砕き、傷を増し加わることが帰ってくるだろう、ということです。事実、それが彼が経験したことでした。主とともに歩む中で、彼は嵐によって自分たちの子供たちのいる家が倒れて死んでしまい、そして皮膚に傷を負っているのですから。

9:19 もし、力について言えば、見よ、神は力強い。もし、さばきについて言えば、だれが私を呼び出すことができるか。9:20 たとい私が正しくても、私自身の口が私を罪ある者とし、たとい私が潔白でも、神は私を曲がった者とされる。

今、見てきました創造における神の力と、また神の圧倒的な正義の前では、自分の弁明がかえって自分を不利にします。どんなことを言っても、自分が罪に定められます。神の圧倒的な義の前

に人は立てないという意味では、正しいでしょう。しかし、もう一度、舞台裏を思い出してください。神がサタンに、ヨブが真実な信仰をもって神を信じているのではないという告発によって、その挑戦を神が受けて許されたものです。ですから、サタンによる告発でもあるのです。

人の心は、神を信じる信仰によって清められます。しかし、サタンはその純粋な信仰を滅ぼそうとします。既に神の赦された罪が赦されていないかのように見せます。また、神が罪とみなしていないものを罪であると断じます。自分が信仰によって決断したことについて、動機が純粋ではなかったとして過剰な反省を強めます。そして、悔い改めて立ち直ったことを、まだ悔い改めが足りないと責め立てます。気をつけてください、悪魔の行なう罪定めと、聖霊の行なわれる罪の自覚がどう違うかを区別できますか？悪魔の行なう罪定めは、自分をキリストの十字架から遠ざけます。もう自分は、キリストに従うことのできない失格者であると思わせます。しかし、聖霊の与える罪の自覚は、キリストの十字架に強く導かれます。キリストがすべての自分の負い目を背負って、愛をもってその罰を受けてくださったことを悟り、深い悔い改めに導かれます。

9:21 私は潔白だ。しかし、私には自分自身がわからない。私は自分のいのちをいとう。

ヨブは再び自分には悪いことをした身に覚えはない、潔白だと言っています。けれども、そうした自分もどこまで自分自身を知っているか分かりません。考えだしたら、自分が正しいと良心で分かっていることも、突き詰めたら分からなくなります。

かつて、ある大学生の姉妹が私に質問してきました。「私は、どれだけ悔い改めたのか分からない。まだ自分が気づいていない罪があって、それを告白していなければ、本当に清められたのかしら。」そこで、私は彼女にヨハネ第一 1 章 9 節を読ませました。「もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。(1ヨハネ 1:9)」すべての悪からきよめられます。知っている罪を告白すれば、神はすべての悪、知られていない悪も清めて、私たちが神と交わりをすることができるようにして下さるのです。

9:22 みな同じことだ。だから私は言う。神は、潔白な者をも悪者をも共に絶ち滅ぼされる。9:23 にわか水が突然出て人を殺すと、神は罪のない者の受ける試練をあざける。9:24 地は悪者の手にゆだねられ、神はそのさばきつかさの顔をおおう。もし、神がそうするのでなければ、そうするのはだれか。

ヨブにとって、圧倒的に力強く、正しい神の前では正しく生きようとしても罪に定められる。そして滅ぼされる。ならば、悪人が滅びるのと何が変わるのか？と問うています。そして、自分自身も滅ぼされて、自分のように正しく生きようとした者はこの世から消えて、悪者だけがはびこるではない

か、と言っています。そして、ヨブは神の主権を信じていますから、そのようにしているのは神ではないか、と訴えているのです。

善を行なう者がその報いを受け、悪を行なう者はその種を刈り取るというのが、エリファズとビルダデの神学でした。そしてヨブも、そこまでの神学しか知りませんでした。したがって、正しい者が苦しみを受け、悪者と同じようにこの地上で滅びてしまうことについての回答を持ち合わせていなかったのです。だから、その報いが見えないからヨブには神が意地悪に見えました。しかし、この地上ではなく後の世において、神は正義を持っておられます。各々を復活させて報いを与えられます。「なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。(2コリント 5:10)」

したがって、正しく生きようとしている者に起こる不幸に対して神を信じる方法は、第一に、「神のしていることは分からない。」という立場を取ることです。神は神であられ、自分は神ではないのです。第二に、イエスが戻ってこられるのを信じることです。戻ってこられる時に栄光の姿に変えられて、報いを受けるからです。

### 3B 仲裁者 25-35

9:25 私の日々は飛脚よりも速い。それは飛び去って、しあわせを見ない。9:26 それは葦の舟のように通り過ぎ、獲物に襲いかかるわしのように通り過ぎる。

ヨブは半ばあきらめています。自分が正しいと主張したところで、自分の命はこの体の状態では間もなく終わるだろうと思っています。すぐにこの命は過ぎ去ってしまうだろうということです。

9:27 たとい「不平を忘れ、憂うつな顔を捨てて、明るくなりたい。」と私が言いましても、9:28 私の受けたすべての苦痛を思うと、私はおびえます。私は知っています。あなたは、私を罪のない者とはして下さりません。9:29 私はきっと、罪ある者とされましょう。ではなぜ、私はいたずらに労するのでしょうか。9:30 たとい私が雪の水で身を洗っても、灰汁で私の手をきよめても、9:31 あなたは私を墓の穴に突き落とし、私の着物は私を忌みきらいます。

ヨブは、潜在的に自分の罪性に怯えています。どんなに正しく生きていたとしても、自分の存在に罪があります。この苦しみによって、自分は何か自分が労して生きようとしても、何を努力しても罪ある者とされ、そして墓に突き落とされるのだろう、ということです。ここで、ヨブは新しい言葉を語ります。午前に読みました、「仲裁者」であります。

9:32 神は私のように人間ではないから、私は「さあ、さばきの座にいっしょに行こう。」と申し入れることはできない。9:33 私たちふたりの上に手を置く仲裁者が私たちの間にはいない。9:34 神



がその杖を私から取り去られるように。その恐ろしさで私をおびえさせないように。9:35 そうすれば、私は語りかけ、神を恐れまい。いま私はそうではないからだ。

圧倒的な力を持ち、正義の主である神に対して、どうやって自分の身を知っていただくのか？この有限で弱い自分が、どのように相手に訴えることができるのか。仲裁に入る人、調停に入る人が必要だということです。今はいない、だから神が自分を虐げる杖は取り去られていない、と言っていますが、午前お話ししたように、イエス・キリストが仲介者としておられるのです。しかし、ヨブはまだ知りません。

### **3A ぶちまける不平 10**

そしてヨブは神に対して訴えても、自分が罪に定められるだけだと言いながら、10章ではなおかつ訴えてみる、自分の心を吐き出してみようと言っています。9章はまだビルダデのことを意識して話していましたが、10章ではたった独りになって神に対して話しています。

他の友人に対しても、ヨブは、最後は神に対してのみ独りになって語るのです。実は、これだけしか方法はありません。私たちは周りで友人のように助けようと強く願うのですが、究極的には本人が単独で神に会うことなのです。人の命についての根源的な問いをしている時に、根源的な答えをくれるのも神ご自身です。

#### **1B 人間の罪定め 1-7**

10:1 私は自分のいのちをいとう。私は自分の不平をぶちまけ、私のたましいの苦しみを語ろう。  
10:2 私は神に言おう。「私を罪ある者となさらないように。なぜ私と争われるかを、知らせてください。10:3 あなたが人をしいたげ、御手のわざをさげすみ、悪者のはかりごとに光を添えることは良いことでしょうか。

ヨブは思い切って、神に自分の心をぶちまけています。全てを吐き出すのは、容易なようで実は簡単ではありません。もしそんなことをしたら、人は聞くに耐えないし、誰も寄り付かなくなるでしょう。しかし神に対してであれば、できます。そしてヨブは、神に訴えることで、先ほど話した罪に定められる恐れを乗り越えて、「罪ある者となさらないように」と言っています。自分は蔑まれているけれども、悪者に光が与えられたままにしてよいのでしょうか、と問っています。

10:4 あなたは肉の目を持っておられるのですか。あるいは、人間が見るように、あなたも見られるのですか。10:5 あなたの日々は人間の日々と同じですか。あるいは、あなたの年は人の年と同じですか。10:6 それで、あなたは私の咎を捜し、私の罪を探られるのですか。10:7 あなたは、私に罪のないことを知っておられ、だれもあなたの手から救い出せる者はいないのに。

これは、人間の目であり、誤った目であります。まさに友人たちがヨブを見ていた目であります。ヨブのことについて、その心や動機について知らないのに、罪定めをしようとしていました。あなたは、そのような人間なのですか？という問いです。ここで、友人の悪い影響があります。ヨブは、神を神として見るのではなく、友人の言葉を聞いたので、その言葉に影響されて神がそのように見えていたのです。ビルダデは正しいことを話しましたが、ヨブに当てはまらないことを話していました。聞いていたヨブは、それに影響されて自分の罪のあら探しをされる神であると言ってしまうているのです。

## 2B 滅ぼすための人造り 8-17

10:8 あなたの御手は私を形造り、造られました。それなのにあなたは私を滅ぼそうとされます。  
10:9 思い出してください。あなたは私を粘土で造られました。あなたは、私をちりに帰そうとされるのですか。

ヨブは、このような形で滅ぼすためであるなら、自分を形造ったことはあまりにも残酷であるとおうことを言っています。これが人間の呻きです。苦しみ、そして死ぬのであれば、なぜ元々、生を受けなければいけないのか？という問いです。

10:10 あなたは私を乳のように注ぎ出し、チーズのように固め、10:11 皮と肉とを私に着せ、骨と筋とで私を編まれたではありませんか。10:12 あなたはいのちと恵みとを私に与え、私を顧みて私の霊を守られました。

これは驚くことに、母の胎で受精する様子をこんなにも正確に描いています。乳というのは、精子のことです。そしてチーズのようというのは受精して、受精卵が育ち、それから胎児になっていきます。こんなに克明に、胎児の成長を説明しています。そうやって、命と恵みを与えられた、そして霊も与えられた、ということです。そうです、人は体だけ作られるのではなく、霊も与えられて造られています。人はゆえに、体だけでなく霊を持っています。

10:13 しかし、あなたはこれらのことを御心に秘めておられました。私はこのことがあなたのうちにあるのを知っています。10:14 もし、私が罪を犯すと、あなたは私を待ちもうけておられ、私の咎を見のがされません。10:15 もし、私が罪ある者とされるのなら、ああ、悲しいことです。私は、正しくても、私の頭をもたげることができません。自分の恥に飽き飽きし、私の悩みを見えていますから。10:16 私の頭が上がると、あなたはたける獅子のように、私を駆り立て、再び私に驚くべき力をふるわれるでしょう。10:17 あなたは私の前にあなたの新しい証人たちを立て、私に向かってあなたの怒りを増し、私をいよいよ苦しめられるでしょう。

自分を母の胎で形造り、霊を与えられたのに、実は神は御心を秘めておられて、そのように誕生させたのは、罪に定めるためのものだったのだ、ということを行っています。そして、自分がどんな

に無罪だと言っても、神は責め立てるに違いないと言っています。この落差を、ヨブは不平として神にぶちまけているのです。

このことについては、イエス様も憤りを抱いておられました。ラザロの死によって、多くの者が悲しみ、マリヤも悲しんでいました。その時にイエスは泣かれて、心に憤りを抱いておられました。なぜか？人は元々、死ぬために生きていなかったのです。生まれたのに死ななければいけないというところに、「なんのために生きているのだらう」という重い問いかけがでできます。そこでイエス様が解決されたのは、復活です。復活こそが、地上で生を受けた者が矛盾を感じることなく生きることが許される希望なのです。

### 3B 死ぬ前の休み 18-22

10:18 なぜ、あなたは私を母の胎から出されたのですか。私が息絶えていたら、だれにも見られなかったでしょうに。10:19 私が生まれて来なかったかのように、母の胎から墓に運び去られていたらよかったものを。10:20 私の生きる日はいくばくもないのですか。それではやめてください。私にかまわないでください。私はわずかでも明るくなりたいのです。10:21 私が、再び帰らぬところ、やみと死の陰の地に行く前に。10:22 そこは暗やみのように真暗な地、死の陰があり、秩序がなく、光も暗やみのようです。」

間もなく死ぬのだったら、こんな苦しみを少しでも和らげてくださいませんか、という訴えです。「構わないでください」という言葉は、絶えず痛みをヨブに与えていることが、神が彼を構まっているということでもあります。そして、陰府の世界を描いています。真っ暗な地であると言っています。

このようにして、ヨブは逃げられないでいます。この肉体がまるで監獄のように、彼にまわりついています。しかし、ヨブは「主は与え、主は取られる」という言葉にあるように、すべてのものは主から来ているという信仰からは離れられませんでした。だからこそ、この不条理に対しても、神が意地悪して行っているのだという不満になっています。もし神の主権への信仰がなければ、「神も仏も要らない」と言って、神を捨てることはできました。けれども彼は、逃げませんでした。神はおられるという信仰、そして神が自分を選んでこの世に生を与えられたという信仰です。

だから、ヨブの激しい言葉は意味を持ちます。いかがでしょうか、大ゲンカをして仲直りする夫婦と、大したことをいつもは話せなくて、いつの間にか互いに違う男あるいは女を見つけている夫婦とどちらが良いでしょうか？もちろん大ゲンカはしたくありません。けれども、真剣だからこそ争います。神と私たちとの関係も同じです。神への不満を吐露するのと、神への思いから離れて心の中で実質、神はいないとするのとどちらが良いでしょうか？ヨブは前者でした。だから希望があります。いや、この苦しみの益とされて、彼は終わりはその忍耐のゆえに大きな報いを受けます。